

# 或る農学生の日誌

宮沢賢治

青空文庫



## 序

ぼくは農学校の三年生になったときから今日まで三年の間のぼくの日誌を公開する。どうせぼくは字も文章も下手だ。ぼくと同じように本気に仕事にかかった人でなかったらこんなもの実に厭な面白くもないものにちがいない。いまぼくが読み返してみてもさえ実に意気地なく野蛮なような気のするところがたくさんあるのだ。ちようど小学校の読本の村のことを書いたところのようじつにうそらしくてわざとらしくていやなところがあるのだ。けれどもぼくのはほんとうだから仕方ない。

ぼくらは空想くうそうでならどんなことでもすることができ。けれどもほんとうの仕事はみんなこんなにじみなのだ。そしてその仕事をまじめにしているともう考えることも考えることもみんなじみな、そうだ、じみというよりはやぼな所謂いわゆる田舎臭いなかくさいものかわにかわ変かわつてしまふ。

ぼくはひがんで云うのでない。けれどもぼくが父とふたりでいろいろな仕事のことを云いながらはたらいしているとところを読んだら、ぼくを軽けいべつする人がきつと沢山たくさんあるだろう。そんなやつをぼくは叩たたきつけてやりたい。ぼくは人を軽けいべつするかそうでなければ妬ねたむことしかできないやつらはいちばん卑怯ひきようなものだと思ふ。ぼくのように働はたらいている仲間なかまよ、仲間よ、ぼく

たちはこんな卑怯さを世界から無くしてしまおうでないか。

一九二五、四月一日 火曜日 晴

今日から新らしい一学期だ。けれども学校へ行っても何だか張り合いがなかった。一年生はまだはいらないし三年生は居ない。居ないのでないもうこつちが三年生なのだが、あの挨拶を待つてそつと横眼で威張っている卑怯な上級生が居ないのだ。そこで何だか今まで頭をぶつつけた低い天井裏がなくなつたような気もするけれどもまた支柱をみんな取つてしまつた桜の木のような気もする。今日の練習にはそれをや

った。去年きよねんの九月古い競馬場けいばじょうのまわりから掘ほつて来て植うえておいたのだ。今ごろ支柱しちゅうを取るのはまだ早いだろうとみんな思った。なぜならこれからちようど小さな根ねがでるころなのに西風はまだまだ吹ふくから幹みきがてこになってそれを切るのだ。けれども菊池先生きくちはみんな除とらせた。花はなが咲さくのに支柱しちゅうがあつては見みつともないと云いうのだけれども桜さくらが咲さくにはまだ一月もその余よもある。菊池先生きくちは春はるになつたのでただ面おも白しろくてあれを取とつたのだとおもう。

その古い縄なわだの冬ふゆの間のごみだの運動場うんどうじょうの隅すみへ集あつめて燃もやした。そこでほかの実習じしゆの組ぐみの人ひとたちは羨うらやましがつた。午前中その実習じしゆをして放課ほうかになつた。教科書きょうこがまだ来きないので明日も

やっぱり実習だという。午后はみんなでテニスコートを直したりした。

四月二日 水曜日 晴

今日は三年生は地質と土性の実習だった。斉藤先生が先に立って女学校の裏で洪積層と第三紀の泥岩の露出を見てそれからだんだん土性を調べながら小船渡の北上の岸へ行つた。河へ出ている広い泥岩の露出で奇体なギザギザのあるくるみの化石だの赤い高師小僧だのたくさん拾つた。それから川岸を下って朝日橋を渡つて砂利になつた広い河原へ出てみんなで鉄

なづち  
鍬でいろいろな岩石の標ひょうほん本を集めたあつ。河原からはもうかげ  
ろうがゆらゆら立つて向うの水などは何だか風のように見えた。  
河原で分れて二時頃ふごころうちへ歸つた。  
そして晩ばんまで垣根かきねを結ゆつて手伝てつだつた。あしたはやすみだ。

四月三日 今日はいいいつけられて一日古い桑くわの根掘りねほをしたので  
大へんつかれた。

四月四日、上田君うえだくんと高橋君たかはしくんは今日も学校へ来なかつた。上田



君は師範学校の試験を受けたそうだけれどもまだ入ったかどうかはわからない。なぜ農学校を二年もやってから師範学校なんかへ行くのだろう。高橋君は家で稼いでいてあとは学校へは行かないと云ったそうだ。高橋君のところは去年の早魃がいちばんひどかったそうだから今年はずいぶん難儀するだろう。それへ較べたらうちなんかは半分でもいくらでも穫れたのだからいい方だ。今年は肥料だのすっかり僕が考えてきつと去年の埋め合せを付ける。実習は苗代掘りだった。去年の秋小さな盛りにしていた土を崩すだけだったから何でもなかった。教科書がたいてい来たそうだ。ただ測量と園芸が来ないとか云っていた。あしたは日曜だけれども無くならないうちに

買いに行こう。僕は国語と修しゅうしん身みは農事試験場へ行つた工藤くどうさんから譲ゆずられてあるから残りのこは九冊さつだけだ。

四月五日 日

みなみまんちようめ  
南万丁目やねがへ屋根換えの手伝てつだえにやられた。なかなかひどかつた。屋根の上よこたにのぼつていたら南の方に学校が長々と横よこたわつていせいとるようせいとに見えた。ぼくは何だか今日は一日あの学校の生徒せいとでないような気がした。教科書は明日買う。

四月六日 月

今日は入学式しきだった。ぼんやりとしてそれでいて何だか堅苦かたくるしそうにしている新入生はおかしなものだ。ところがいまにみんな暴れ出す。来年になるとあれがみんな二年生になっていい気になる。さ来年はみんな僕ぼくらのようになってまた新入生をわらう。そう考かんえると何だか変へんな気がする。伊藤君いとうくんと行つて本屋ほんやへ教科書を九冊さつだけとつておいてもらうように頼たのんでおいた。

四月七日 火、朝父から金を貰もらつて教科書を買つた。

そして今日から授業じゆぎようだ。測量そくりようはたしかに面白おもしろい。地

図を見るのも面白い。ぜんたいここらの田や畑はたけでほんとうの反た別んべつになつてゐる処ところがないと武田先生たけだが云いつた。それだから仕し事ごとの予定よていも肥料ひりょうの入れようも見当まいがつかないのだ。僕ぼくはもう少し習ならつたらうちの田をみんな一枚まいずつ測はかつて帳ちようめん面に綴とじておく。そして肥料だのすつかり考かんえてやる。きつと今年こねんは去き年の早かん魃ぼつの埋うめ合せと、それから僕ぼくの授じゆぎ業ぎやう料りやうぐらいを穫とつてみせる。実習じっしゅうは今日けふも苗代なわしろほ掘りほりだつた。

四月八日 水、今日は実習じっしゅうはなくて学校の行進歌こうしんかの練れん習しゅうをした。僕ぼくらが歌うつて一年生いちねんせいがまねをするのだ。けれども

ぼくは何だかお圧しつけられるようであの行進歌こうしんかはきらいだ。  
 何だかあの歌を歌うと頭がいた痛くなるような気がする。実習じっしゅう  
 のほうが却かえつていいくらいだ。学校から纏まとめて注文ちゅうもんすると  
 いうので僕はぼく苹果りんごを二本と葡萄ぶどうを一本頼たのんでおいた。

四月九日〔以下空白〕

一千九百廿五年五月五日 晴  
にじゅう

まだ朝の風は冷つめたいけれども学校へ上り口の公園の桜さくらは咲さいた。

けれどもぼくは桜の花はあんまり好きでない。朝日にすかされたのを木の下から見ると何だか蛙かえるたまごの卵のような気がする。それにすぐ古くさい歌やなんか思い出すしまた歌など詠よむのろろしたような昔むかしの人を考えるからどうもいやだ。そんなことがなかつたら僕ぼくはもつと好きだったかも知れない。誰も桜が立派りっぱだなんて云いわなかつたら僕はきつと大声でそのきれいさを叫さけんだかも知れない。僕は却かえつてたんぽぽの毛のほうを好きだ。夕陽ゆうひになんか照てらされたらいくら立派だか知れない。

今日の実習は陸稻播おかほまきで面おも白しろかつた。みんなで二うねずつやるのだ。ぼくは杭くいを借かりて来て定規じょうぎをあてて播まいた。種子しゆしが間かん隔かくを正しくまっすぐになつた時はうれしかった。いまに芽め

を出せばその通り青く見えるんだ。学校の田のなかにはきつとひばりの巣すが三つ四つある。実習している間になんべんも降りたのだ。けれども飛びあがるところはつい見なかった。ひばりは降りるときはわざと巣からはなれて降りるから飛びあがるところを見なければ巣のありかはわからない。

一千九百二十五年五月六日

今日学校で武田たけだ先生から三年生の修学旅行しゅうがくりょこうのはなしがあった。今月の十八日の夜十時で発たつて二十三日まで札幌さっぽろから室蘭むろらんをまわつて来るのだそうだ。先生は手に取るとるように向うむこの

景色けしきだの見て来ることだの話した。

津つがる軽かいき海きよう峡、トラピスト、函はこだて館、五ごり稜よう郭かく、えぞ富士、白

ららかば

樺おたる、小樽、札幌の大学、麦酒ビール会社、博はく物ぶつ館かん、デンマーク人

の農のうじよう場、苦とまこまい小こ牧まい、白しらおい老らうのアイヌ部落、室むろらん蘭らん、あああほく僕

は数かぞえただけで胸むねが踊おどる。五時間目には菊池きくち先生がうちへ宛あて

た手紙わたを渡して、またいろいろ話された。武田先生と菊池先生

がついて行かれるのだそうだ。

行く人が二十八人にならなければやめるそうだ。それは県けんの規き

則そくが全ぜん級きゆうの三分の一以上いじようさんか参加するようになってるからだ

そうだ。けれども学校へ十九円納おさめるのだしあと五円もかかる

そうだから。きつと行けると思う人はと云ったら内ない藤とう君や四



人だけ手をあげた。みんな町の人たちだ。うちではやってくれるだろうか。父が居ないので母へだけ話したけれども母は心配いそうに眼をあげただけで何とも云わなかった。けれどもきつと父はやってくれるだろう。そしたら僕は大きな手帳へ二冊も書いて来て見せよう。

五月七日

今朝父へ学校からの手紙を渡してそれからいろいろ先生の云ったことを話そうとした。すると父は手紙を読んでしまつてあと  
はなぜか大へんあたりに気兼ねしたようすで僕が半分しか云わ

ないうちに止めてしまった。そしてよく相談そうだんするからと云つた。祖母そぼや母に気兼ねをしているのかもしれない。

五月八日 行く人が大ぶあるようだ。けれどもうちでは誰だれも何とも云わない。だから僕ぼくはずいぶんつらい。

五月九日、

三時間目に菊池きくち先生がまたいろいろ話された。行くときまつた人はみんな面白おもしろそうにして聞いていた。僕は頭あつが熱あつくて痛いたく

なつた。ああ北海道、雑ざつ囊のうを下げてマントをぐるぐる捲まいて肩かたにかけて津つ軽がる海かい峡きようをみんなと船ふねで渡わたつたらどんなに嬉うれしいだろう。

五月十日 今日もだめだ。

五月十一日 日曜 くもり曇 午前は母や祖母そぼといつしよに田打たうちをした。午後ごごはうちのひば垣がきをはさんだ。何だか修学しゆうがく旅行りょこうの話が出てから家中へんになつてしまつた。僕はもう行かなくても

いい。行かなくてもいいから学校ではあと授業じゆぎようの時間に行く人を調べたり旅行の話をしたりしなればいいのだ。

北海道なんか何だ。ぼくは今に働いて自分で金をもうけてどこへでも行くんだ。ブラジルへでも行ってみせる。

五月十二日、今日また人数を調べた。二十八人に四人足りなかった。みんなは僕ぼくだの斉藤君さいとうくんだの行かないので旅行が不成立ふせいりつになると云いってしきりに責せめた。武田先生たけだまで何だか変へんな顔をして僕に行けと云う。僕はほんとうにつらい。明后日みょうごにちまでにすっかり決きまるのだ。夕方父が帰って炉ろばたに居いたからぼくは

思い切つて父にもう一度学校の事情を云つた。

すると父が母もまだ伊勢詣りさえしないのだし祖母だつて伊勢詣り一ぺんとここらの観音巡り一ぺんしただけこの十何年死ぬまでに善光寺へお詣りしたいとそればかり云つているのだ、ことに去年からのここら全体の早魃でいま外へ遊んで歩くなつてことはとなりやみんなへ悪くてどうもいけないということ云つた。

僕はいくら下を向いても炉のなかへ涙がこぼれて仕方なかつた。それでもしばらくたつてからそんなら僕はもう行かなくてもいいからと云つた。ぼくはみんなが修学旅行へ発つ間休みだといって学校は欠席しようと思つたのだ。すると父が

またしばらくだまっていたがとにかくもいちど相談そうだんするからと云つてあとはいろいろ稲いねの種類しゅるいのことだのふだんきかないようなことまでぼくにきいた。ぼくはけれども気持きもちがさつぱりした。

五月十三日 今日学校から帰つて田に行つてみたら母だけ一人居いて何だか嬉うれしそうにして田の畦あぜを切つていた。

何かあつたのかと思つてきいたら、今にお父さんから聞けといつた。ぼくはきつと修学旅行のことだと思つた。

僕ぼくもそこで母が家へ帰るまで田打たうちをして助たすけた。

けれども父はまだ帰つて来ない。

五月十四日、昨夜父がさくや晩おそく帰つて来て、僕を修学旅行にやると云つた。母も嬉しそうだったし祖母もいろいろ向むこうのことを聞いたことを云つた。祖母の云うのはみんな北海道開拓かいたく当時のこととらしくて熊くまだのアイヌだの南瓜かぼちやの飯めしや玉蜀黍とうもろこしの団子だんごやいまとはよほどちがうだろうと思われた。今日学校へ行つて武田たけだ先生へ行くと云いつて届とどけたら先生も大へんよろこんだ。もうあと二人足りないけれども定員ていいんを超こえたことにして県けんへは申しん書せを出いしたそうだ。ぼくはもう行つてきつとすつかり見て

来る、そしてみんなへ詳しく話すのだ。

一九二五、五、一八、

汽車は闇やみのなかをどんどん北へ走つて行く。盛岡もりおかの上のそらがまだぼうつと明るく濁にごつて見える。黒い藪やぶだの松まつ林ばやしだのぐんぐん窓まどを通つて行く。北上山地きたかみの上のへりが時々かすかに見える。

さあいよいよぼくも岩手県いわてけんをはなれるのだ。

うちではみんなもう寝ねただろう。祖母ばあさんはぼくにお守まもりを借かしてくれた。さよなら、北上山地、北上川、岩手県の夜の風、



今武田先生が廻まわつてみんなの席せきの工合ぐあいや何かを見て行つた。

一九二六、五、一九、〔以下空白〕

五月十九日

\*

いま汽車は青森県の海岸かいがんを走っている。海は針はりをたくさん並なら

べたように光っているし木のいつぱい生えた三角な島もある。  
 いま見ているこの白い海が太平洋なのだ。その向うにアメリカがほんとうにあるのだ。ぼくは何だか変な気がする。  
 海が岬で見えなくなつた。松林だ。また見える。次は浅虫だ。石を載せた屋根も見える。何て愉快だろう。

\*

青森の町は盛岡ぐらいたつた。停車場の前にはバナナだの苹果だの売る人がたくさんいた。待合室は大きくてたくさんの人が顔を洗つたり物を食べたりしている。待合室で白い服

を着<sup>き</sup>た車<sup>しゃ</sup>掌<sup>しよう</sup>みたいな人が蕎<sup>そば</sup>麦も売<sup>ばい</sup>っているのはおかしい。

＊

船はいま黒<sup>くろ</sup>い煙<sup>けむり</sup>を青森の方へ長くひいて下<sup>しも</sup>北<sup>きた</sup>半<sup>はん</sup>島<sup>とう</sup>と津<sup>つ</sup>軽<sup>がる</sup>半<sup>はん</sup>島の間を通<sup>とお</sup>つて海<sup>かい</sup>峽<sup>きやう</sup>へ出<sup>い</sup>るところだ。みんなは校歌をうたっている。けむりの影<sup>かげ</sup>は波<sup>なみ</sup>にうつつて黒<sup>くろ</sup>い鏡<sup>かがみ</sup>のようだ。津<sup>つ</sup>軽<sup>がる</sup>半<sup>はん</sup>島の方はまるで学校にある広<sup>ひろ</sup>重<sup>しげ</sup>の絵のようだ。山の谷がみんな海まで来<sup>こ</sup>ているのだ。そして海<sup>かい</sup>岸<sup>がん</sup>にわ<sup>わ</sup>ずかの砂<sup>すな</sup>浜<sup>はま</sup>があつてそこには巨<sup>おお</sup>きな黒<sup>くろ</sup>松<sup>まつ</sup>の並<sup>なみ</sup>木<sup>き</sup>のある街<sup>かい</sup>道<sup>どう</sup>が通<sup>とお</sup>っている。少し大きな谷には小<sup>こ</sup>きな家<sup>いえ</sup>が二、三十も建<sup>た</sup>つていてその浜には

五、六そこの舟もある。

さつきから見えていた白い燈台はすぐそこだ。ぼくは船が横を通る間にだまつてすつかり見てやろう。絵が上手だといんだけれども僕は絵は描けないから覚えて行つてみんな話すのだ。風は寒いけれどもいい天気だ。僕は少しも船に酔わない。ほかにも誰も酔つたものはない。

\*

いるかの群が船の横を通っている。いちばんはじめに見附けたのは僕だ。ちよつと向うを見たら何か黒いものが波から抜け出

て小さな弧を描いてまた波へはいったのでどうしたのかと思つてみていたらまたすぐ近くにも出た。それからあつちにもこつちにも出た。そこでぼくはみんなに知らせた。何だか手を氣を付けの姿勢で水を出たり入ったりしているようで滑稽だ。先生も何だかわからなかったようだが漁師の頭らしい洋服を着た肥つた人がああるかですと云つた。あんまりみんな甲板のこつち側へばかり来たものだから少し船が傾いた。風が出てきた。

何だか波が高くなつてきた。

東も西も海だ。向うにもう北海道が見える。何だか工合がわるくなつてきた。

\*

いま汽車は函館はこだてを発たつて小樽おたるへ向むかつて走まっている。窓まどの外ははまつくらだ。もう十一時だ。函館の公園はたつたいま見て来たばかりだけれどもまるで夢ゆめのようだ。

おほ  
巨おおきな桜さくらへみんな百ぐらいつの電燈でんとうがついていた。それに赤や青の灯ひや池にはかきつばたの形かたちした電燈でんとうの仕掛しかけものそれみなと  
れに港みなとの船の灯や電車の火花はなじつにうつくしかつた。けれどもぼくは昨夜さくやからよく寝ねないのでつかれた。書かないでおいだつてあんなうつくしい景色けしきは忘れわすれない。それからひるは過かりん燐さん酸

の工場と五稜郭<sup>ごりようかく</sup>。過燐酸石灰<sup>せつかい</sup>、硫酸<sup>りゅうさん</sup>もつくる。

五月廿日

\*

いま窓<sup>まど</sup>の右手にえぞ富士<sup>ふじ</sup>が見える。火山だ。頭<sup>ひら</sup>が平たい。焼<sup>や</sup>いた枕<sup>まくらぎ</sup>木でこさえた小さな家がある。熊笹<sup>くまざさ</sup>が茂<sup>しげ</sup>っている。植<sup>し</sup>よくみんち  
民地だ。

\*

いま小樽おたるの公園に居いる。高等商業こうとうしょうぎょうの標本室ひょうほんしつも見てきた。馬鈴薯ばれいしょからできるもの百五、六十種しゆの標本が面白おもしろかつた。

この公園も丘おかになつてゐる。白樺しらかばがたくさんある。まつ青さおな小樽湾わんが一目だ。軍艦ぐんかんが入つてゐるので海軍には旗はたも立つてゐる。時間があれば見せるのだがと武田先生たけだが云つた。ベンチへ座すわつてやすんでゐると赤い蟹かにをゆでたのを売りに来る。何なにだか怖こわいようだ。よくあんなの食べるものだ。



\*

一千九百廿五年十月十六日

一時間目の修身しゅうしんの講義こうぎが済すんでもまだ時間が余あまっていたら校長が何でも質問しつもんしていいと云った。けれども誰だれも黙だまつていて下を向むいているばかりだった。ききたいことは僕ぼくだつてみんなだつて沢山たくさんあるのだ。けれどもぼくらがほんとうにききたいことをきくと先生はきつと顔をおかしくするからだめなのだ。なぜ修身がほんとうにわれわれのしなければならぬと信しんずる

ことを教えるものなら、どんな質問でも出さしてはつきりそれをほんとうかうそか示さないのだろう。

一千九百廿五年十月廿五日

今日は土性調査の実習だった。僕は第二班の班長で図板をもった。あとは五人でハムマアだの検土杖だの試験紙だの塩化加里の瓶だの持つて学校を出るときの愉快さは何とも云われなかった。谷先生もほんとうに愉快そうだった。六班がみんな思い思いの計画で別々のコースをとつて調査にかかった。僕は郡で調べたのをちゃんと写して予察図にして持つていたか

らほかの班のようにまごつかなかつた。けれどもなかなかわ  
 かない。郡のも十万分一だしほんの大体しか調べっていない。  
 猿ヶ石川さるがいのしの南の平地ひらちに十時半ころまでにできた。それから洪  
 うせきそう キーデンノー 安山あんざん集塊岩しゅうかいがんの丘おかつづぎのにも被かぶさつ  
 積層が旧天王の安山集塊岩の丘つづぎのにも被さつ  
 ているかがいちばんの疑問ぎもんだったけれどもぼくたちは集塊岩の  
 いくつもの露頭ろとうを丘の頂部ちようぶ近くで見附みつけた。結局けつぎよく洪積紀き  
 は地形図の百四十米メートルの線以下いかという大体の見当も附けてあとは  
 先生が云ったように木の育ちそだ工合ぐあいや何かを参照さんしやうして決きめた。  
 ぼくは土性の調査よりも地質ちしつの方が面白おもしろい。土性の方ならた  
 だ土をしらべてその場所を地図の上にその色で取とつていくだけ  
 なのだが地質の方は考えなければいけないしその考えがなかな

かうまくあたるのだから。

ぼくらは松まつばやし林の中だの萱かやの中で何べんもほかの班に出会つ

た。みんなぼくらの地図をのぞきたがつた。

萱の中からは何べんも雉きじ子も飛とんだ。

耕地整理こうちせいりになつているところがやつぱり旱害かんがいで稲いねは殆ほとんど仕

付つからなかつたらしく赤いみじかい雑草ざっそうが生はえておまけに一

ぱいにひびわれていた。

やつと仕付とかつた所ところも少しも分蘖ぶんけつせず赤くなつて実みのはいら

ない稲がそのまま刈かりとられずに立つていた。耕地整理の先に

立つた人はみんなの為ためにしたのださうだけれどもほんとうにひ

どいだらう。ぼくらはその土性どせいもすっかりしらべた。水さえ

来るならきつと將しょうらい来は反たんあたり当ごく三石まではとれるようにできると思う。

午後一時に約やくそく束の通り各かくはん班が猿さるヶ石川がいしの岸きしにあるきれいな安山集塊岩あんざんしゅうかいがんの露出ろしゆつのところあつまに集つた。どこからか小梨こなしを貰もらつたと云つて先生はみんなに分けた。ぼくたちはそこで地ぬ図を塗りなおしたりした。先生はその場所ばしょでは誰だれのभीいともわる悪いとも云わなかつた。しばらくやすんでから、こんどはみんななで先生について川かの北かこうの花崗岩がんだの三紀きの泥岩でいがんだのまではいつたこ込んだ地質ちしつや土性つぎのところを教わつてあるいた。図は次つぎの月曜つきまでに清書せいしよして出すことにした。

ぼくはあの図を出して先生に直なおしてもらったら次の日曜たかはに高橋君しくんを頼たのんで僕たののうちの近きん所じよのをすつかりこしらえてしま  
うんだ。僕たののうちの近きんなら洪積こうせきと沖積ちゆうせきがあるきりだし  
ずっと簡単かんたんだ。それでも肥料ひりようの入れようやなんかまるで  
がうんだから。いまならみんなはまるで反対はんたいにやってるん  
ないかと思う。

一九二五、十一月十日。

今日けふ実習じっしゅうが済すんでから農舍のうしやの前に立たってグラジオラスの  
球根きゆうこんの早ほしてあるのを見みていたら武田先生たけだも鶏小屋にわとりごやの消

ようどく  
毒 だか済んで硫黄華をずぼんへいっばいつけて来られた。そ  
してやつぱり球根を見ていられたがそこから大きなのを三つば  
かり取つて僕に呉れた。僕がもじもじしているところには新らし  
い高価い種類だよ。君にだけやるから来春植えてみたまえと  
云つた。すると農場の方から花の係りの内藤先生が来たら武  
田先生は大へんあわててポケットへしまつておきたまえ、と云  
つた。ぼくは変な気がしたけれども仕方なくポケットへ入れた。  
すると武田先生は急いで農舎の中へはいつて農具だか何だか整  
理し出した。ぼくはいやで仕方なかつたので内藤先生が行つて  
からそつと球根をむしろの中へ返して、急いで校舎へ入つて実  
習服を着換えてうちに帰つた。

一千九百二十六年三月廿「一字分空白」日、

塩水撰えんすいせんをやった。うちのが済すんでから櫓戸ならどのもやった。

本にある通りの比ひじゆう重じゆうでやったら亀かめの尾おは半分も残のこらなかつた。

去年きよねんの旱かんがい害がいはいちばんよかつた所ところでもこんな工合ぐあいだつたの

だ。けれども陸羽りくゆう一三二号ごうのほうは三割わりぐらいしか浮うく分ぶんがな

かつた。それでも塩水選せんをかけたので恰度ちやうど六斗とあつたから本

田たの一町一反たん分ぶんには充じゆうぶん分ぶんだろう。とにかく僕ぼくは今日半日けふで

大丈夫だいじようぶ五十円ごじゅうえんの仕事しごとはした訳わけだ。

なぜならいままでは塩水選せんをしないでやつと反たんあたり当あ二石こくそこ



そこしかとつていなかつたのを今度こんどはあちこちのうじしけんじょうの農事試験場  
 の発はつびよう表ひょうのように一割の二斗ずつの増ぞうしゆう収しゆうとしても一町一  
 反では二石二斗になるのだ。みんなにもほんとうにいいという  
 ことが判わかるようになったら、ぼくは同じ塩水で長ちようこん根こんぜんた  
 いのをやるようにしよう。一軒けんのうちで三十円ずつ得とくしてもこ  
 の部落ぶらくぜんたい全体では四百五十円になる。それが五、六人ただ半日  
 の仕事しごとなのだ。塩水選をする間は父はそこらの冬の間のごみを  
 集あつめて焼やいた。粃もみができると父は細ほそなが長ながくきれいに藁わらを通して  
 編あんだ俵たわらにつめて中へつめた。あれは合理ごうりてき的てきだと思う。湧わきみ  
 水ずがないので、あのつつみへ漬つけた。氷こおりがまだどての陰かげには  
 浮ういているからちようど摂せつ氏し零度れいどぐらいだらう。十二月にどて

のひびを埋めてから水は六分目までたまっていた。今年こそき  
 つといいのだ。あんなひどい早魃かんぼつが二年続いたことさえいま  
 までの氣象きしやうの統計とうけいにはなかったというくらいなもの、どん  
 な偶然ぐうぜんが集ったって今年まで続くなんてことはないはずだ。  
 氣候きこうさえあたり前だったら今年は僕はきつといままでの早魃の  
 損害そんがいを恢復かいふくしてみせる。そして来年らいねんからはもううちの経け  
 済いざいも楽にするし長根いざいぜんたいまできつと生々いきいきとした愉快ゆかいなも  
 のにしてみせる。

一千九百二十六年六月十四日 今日はやつと正午しょうごから七時まで

番水ばんすいがあたつたので樋番といばんをした。何せ去年きよねんからの巨おおきな  
 ひびもあるとみえて水はなかなかたまらなかつた。くろへ腰掛こしか  
 けてこぼこぼはつていく温あたたかい水へ足を入れていてついとろつと  
 したらなんだかぼくが稲いねになつたような気がした。そしてぼく  
 が桃ももいろをした熱病ねつびようにかかつていてそこへいま水が来たの  
 でぼくは足から水を吸すいあげているのだつた。どきつとして眼め  
 をさました。水がこぼこぼ裂目さけめのところあわで泡ふを吹きながらイン  
 クのようにゆつくりゆつくりひろがっていったのだ。

水が来なくなつて下田しろかきの代掻しろかきができなくなつてから今日けふで恰ち  
 度ようど十二日雨ふが降らない。いったいそらがどう変かわつたのだらう。  
 あんな旱魃かんばつの二年つづ続つづいた記録きろくがな無いと測候所そっこうじよが云いつたのに

これで三年続くわけでないか。大堰おおぜきの水もまるで四寸すんぐらいしかない。夕方になってやつといままでの分へ一わたり水がかかった。

三時ごろ水がさっぱり来なくなつたからどうしたのかと思つて大堰の下の岐わかれまで行つてみたら権ごんじゆう十じゆうがこつちをとめてじぶんの方へ向むけていた。ぼくはまるで権十ごんじゆうが甘藍かんらんの夜盗虫よとうむしみたいな気がした。顔がむくむく膨ふくれていて、おまけにあんな冠かぶらなくてもいいような穴あなのあいだつばの下どかたつた土方どかたしやつぽをかぶつてその上からまた頬ほおかぶりをしているのだ。

手も足も膨ふくれているからぼくはまるで権十ごんじゆうが夜盗虫よとうむしみたいな気がした。何をするんだと云つたら、なんだ、農学校のう終おわつたつて

自分だけいいことをするなと云うのだ。ぼくもむつとした。何だ、農学校なぞ終つても終らなくてもいまはぼくのこの番にあたつて水を引いているのだ。それを盗ぬすんで行くとは何だ。と云つたら、学校へ入つたんでしやべれるようになったもんな、と云う。ぼくはもう大きな石をたたきつけてやろうとさえ思つた。

けれども権十はそのまま行つてしまつたから、ぼくは水をうちの方へ向け直なおした。やっぱり権十はぼくを子供こどもだと思つてぼくだけ居いたものだからあんなことをしたのだ。いまにみる、ぼくは卑怯ひきようなやつらはみんな片かたつぱしから叩たたきつけてやるから。

一千九百二十七年八月廿一日

稲いねがとうとう倒たおれてしまった。ぼくはもうどうしていいかわか  
らない。あれぐらい昨日きのうまでしつかりしていたのに、明あけがた方の  
烈はげしい雷雨らいうからさつきまでにほとんど半分倒れてしまった。喜き  
作さくのもこつそり行いつてみたけれどもやつぱり倒れた。いまもま  
だ降ふっている。父はわらつて大だい丈夫じようぶ大丈夫だと云うけれども  
それはぼくをなだめるためでじつは大へんひどいのだ。母はま  
るでぼくのことばかり心しん配ぱいしている。ぼくはうちの稲が倒れ  
ただけなら何でもないので。ぼくが肥ひり料りようを教えた喜作のだつ  
てそれだけなら何でもないので。それだけならぼくは冬に鉄てつ道どうへ

出ても行商ぎようしようしてもきつと取り返しとをつける。けれども、あれぐらい手入をしてあれぐらい肥料を考えてやってそれでこんなになるのならもう村はどこもつとよくなる見込みこみはないのだ。ぼくはどこへも相談そうだんに行くところがない。学校へ行つたつてだめだ。……先生はああ倒れたのか、苗なえが弱くはなかつたかな、あんまり力を落おとしてはいけないよ、ぐらいのことを云つて笑わらうだけのもんだ。日誌にっし、日誌、ぼくはこの書きつける日誌がなかつたら今夜どうしているだろう。せきはとめたし落し口は切つたし田のなかへはまだ入られないしどうすることもできずだまつてあのぼしよぼしよしたりまたおどすように強くなつたりする雨の音を聞いていなければならぬのだ。いったいこの雨が

あしたのうちに晴れるだなんてことがあるだろうか。

ああどうでもいい、なるようになるんだ。あした雨が晴れるか  
晴れないかよりも、今夜ぼくが………を一足つくれることの  
ほうがよっぽどたしかなんだから。



# 青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

※底本は、一つ目の「猿ヶ石」の「ヶ」（区点番号5186）は大振りに、二つ目の「猿ヶ石」のそれは、小振りにつくっています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 或る農学生の日誌

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>